

第1回 栃木県総合計画懇談会「環境戦略部会」

会議結果の概要

平成22年7月1日

栃木県総合政策部総合政策課

第1回栃木県総合計画懇談会「環境戦略部会」の開催結果

- 1 日 時 平成22年7月1日(木) 14:00～15:45
- 2 場 所 県庁本館 大会議室2
- 3 出席者 和田部会長、大嶋委員、小池委員、高橋委員、中村委員、西巻委員、渡邊委員
〔県〕総合政策部長、総合政策部次長、関係部局次長ほか
- 4 概 要

事務局から「重点戦略におけるプロジェクト(案)」及び「次期総合計画における指標設定の基本的な考え方」について説明し、意見交換を行った。

【発言要旨】

(1) 重点戦略におけるプロジェクト(案)について

〔部会長〕

事務局から示されたプロジェクトはどうか、そのプロジェクトを達成するためにどんな取組が必要かなどについて御意見をいただきたい。たたき台ということで、議論の余地が多々あると思うので、示されたプロジェクトの枠にとらわれず、また、自分の発言がどのプロジェクトに属する、属しない、あるいは考え方そのものが違うかもしれない、といったことも気にしないで、自由な発想と発言をお願いしたい。

〔委員〕

普段は家庭の中のエコを考えているくらいで、県全体のエコとか国のエコということには余り意識をしていないが、「未来につながる環境戦略」ということは、県の方向性を出すということだろう。ということは、私たちの生活にかかわる方向性だと思う。県が作成した上等な冊子を県民一人ひとりが読むことは難しいわけだから、もっと具体的な指標が出てくると主婦としては分かりやすい、ということがまず大前提にある。

「協働による環境学習・環境保全活動の推進プロジェクト」についてだが、今まで、県民が自ら環境問題を勉強する場が与えられていなかったと思う。また、県民だれもが実践するエコ、水を大切にしようとか、ゴミを出さないようにしよう、と言っても、県としてどういうエコを住民に望んでいるのかが見えなかった。今回、懇談会に参加し、様々なことを考えていることは分かったが、大きな題目だけを提示されても・・・、これは多分8割、9割決まっていることなのだろうと思うが、今後、計画が厚い冊子になり、各市町村に配られて、どこまで実現するのかというのが今の私の考えである。

〔部会長〕

8割、9割決まっていると考える必要はない。また、主婦に分かりやすい指標が欲しいということであれば、この場で、例えばということで提案いただきたい。公募委員、あるいは主婦としての立場から、大きなところにどう接合するかなど考えずに、あれが欲しい、これが欲しい、という具体的なものがあれば、随時、発言願いたいと思う。

〔委員〕

近年、地球温暖化問題がクローズアップされ、エコなどの言葉が社会に浸透してきている。これまでの現状と課題の中にもあるように、大量生産・大量消費・大量廃棄に「もったいない」が提唱され、私たち一人ひとりの生活の仕方を変えていこうという機運が高まっている。この背景には地球環境が悪化しているということがあると思うが、1997年にマイアミ宣言、子どもの環境保健に関する8か国の環境リーダーの宣言書というのがあった。この中で「各国は、子どもの環境保健を環境問題の最高の優先順位として取り組む」ということが書かれている。2003年の環境白書には「人類や生態系にとって、化学物質に長期間曝露されるという状況は、歴史上初めて生じている」とある。環境戦略の中に、化学物質問題という視点も入れていくことが、3つの大きな柱の土台になるのではないかと考える。

90年代から小児を中心に急激に増加してきた様々なアレルギーや発達障害、シックハウス症候群や化学物質過敏症などの新たな疾患、異常出産、生活習慣病などについて、環境中の化学物質がその要因である可能性が高いという国内外の研究に基づいて各省庁が研究対策を進めている。環境省のエコチル調査（子どもの健康と環境に関する全国調査）にもあるように、胎児にも影響を与えている可能性を否定できないとすれば、県の政策にも環境改善型予防医学の視点を加えることが重要ではないだろうか。未来世代も視野に入れて現状を考えていかないと、これから子どもたちが生まれ、環境が破壊されてしまうという状況に陥る可能性も否定できない。

また、「人と自然が共生する“とちぎ”の実現プロジェクト」に「豊かな自然環境」と書いてあるが、実際のところ、生態系を調べているNPOの方などに伺うと、生物がいるところを探し求めて調査しているということだった。緑があって豊かに見えるが、実はその生態系は崩れていて豊かではない、この辺の視点を、戦略の中に入れて欲しいと考えている。

〔部会長〕

環境に含む化学物質、環境ホルモンといった言葉がはやったこともあった。もう一つ、生態系が一見豊かに見えるが、実は1日に何十種類と生物種は滅びているという話もあった。いきなり2つの大きなポイントを挙げられると困りそうなので、後ほどでも、会議の後でも結構なので、もう少しブレイクダウンした形で、意見がメモをいただくと入れやすくなると思う。

〔委員〕

まず、1点目として、現状と課題であるが、重要な点を分かりやすくまとめていると思うが、私も主婦の一人であり、県民全員が見るのであれば、前向きなメッセージを込めた内容にできないかと考えている。廃棄物の問題、温暖化の問題は、重要な問題だが、この文章だけを読むと、大変しんどいことをやらなくてはならないイメージである。環境保全をしていくこと、また、活かしていくことこそ、豊かな社会発展につながるというような、何かポジティブなメッセージというものが入ると少し勇気が与えられるのではないかと。栃木の環境は恵まれた点がたくさんあるので、そういったことが十

分に可能ではないかと思っている。

2点目であるが、3つのプロジェクトは、網羅するという形で考案を重ねて練られた言葉だと思うが、一方、何をやるのだろうというイメージも持ってしまふ。分かりやすい言葉、イメージできる言葉があれば良いと思った。

「協働による環境学習・環境保全活動の推進プロジェクト」については、協働というのが新しい重要な言葉で、キーワードになってくる。一方で、これまでの環境学習は、どちらかといえば教えられる環境学習、エコ意識を高めようというのが多かった。その中で、家庭の中でも小まめに電気を切ろうとか、冷房は28度にしようという目標を掲げ、まじめに我慢してやるという環境対策、環境学習が非常に多かった。そうではないというメッセージをぜひ打ち立てて欲しい。そういう観点からは、環境学習という言葉が良いかどうかは分からないが、協働、あるいは、県民が自己実現をした結果として循環型社会や低炭素社会につながっている、というようなポジティブな表現になれば、イメージアップするのではないだろうか。

私は、大学で環境に興味がある学生を支援する活動をしているが、そういった市民、学生など現場にいる人たちの意識は非常に高い。まさに家庭の主婦もそうだと思う。私もやっているが、家庭の中で誰も見ていないのに一所懸命にゴミの分別をしている。栃木県民は特にまじめなので、そういったことを一所懸命にやっていると思う。そういうところを、相乗効果を出しながら伸ばしながら誘導するという意味で、県民に主役になってもらえるような言葉を出しても良いかもしれない。そうすることが、協働をする上でお互いのキャパシティー・ビルディングにつながるのではないかと。

〔委員〕

「協働による環境学習・環境保全活動の推進プロジェクト」に関して、太陽光とか風力、バイオマスが、無前提に自然エネルギーに行くのだという方向で進んでしまうと、特に子どもたちなどは、実際のもっと大きな前段階でのエネルギー供給をどうしているか、ということが抜けてしまう。太陽光や風力などの自然にやさしいエネルギーが、安定的に我々の生活を支えるようになるという前提で話が進むと、ある意味では怖いというか、違う方向に行ってしまう。

地球温暖化を一つ取っても、今、本当にどうかということについて、ここ数年、疑義が出てきている。この間の(アイスランドの)火山噴火の対応についても、無前提に危ないというよりも、実際に(航空機が)飛んでみたら、環境からみて大丈夫だったということがある。エネルギーの安定的な供給という点では、いろいろな賛否はあるかもしれないが、原発のようなことも今かなり見直されていて、アメリカでは大統領自らが、そちらに舵を切っているということも読んだ。我々はエネルギーを消費していて、感情的には確かに自然のエネルギーが良いというのは分かるが、現実それで供給できるのかどうかということになると、場合によっては、石炭とか化石エネルギーというのは悪の権化でも何でも無いと思うので、その辺の軟着陸も含めて欲しいと思う。

学習という場合には、子どもたちは吸収が早いので、こういう意見もあるよと懐疑論や賛成論、反

対論を含めた形での学習の環境づくりが大切だと思う。子どもたちの中で、今の日本のエネルギーの供給が実際にどうなっているのか、また、自然エネルギーにはどういう欠陥があるのか、ということが抜けている感じがする。どういう形で盛り込むかは別として、学習という点では非常に重要なことだと思う。

〔部会長〕

「環境を起点とする活力の創出プロジェクト」に関しても、水力、バイオマス、太陽光、ただ今の意見のとおりでみんな足りない。部分的なところでエネルギー効率を高める、あるいは、地産地消型のエネルギー消費を増やすのは良いかと思うが、総エネルギーの中に占める割合はまだ微々たるものである。デンマークが風力で何割という話はあるが、結局、日本での風力発電は、言うに足りるような量にはならないというのが大体の結論である。状況を正確に教えて、そこから発想してもらうのは非常に大切な話だと思う。事務局は、修正を加えることは大変かもしれないが、これは本当にきちんとやらないと大きな誤解を招くということは指摘のとおりである。

〔委員〕

太陽光、バイオマスというのは、かなり浸透してきていると思うが、現実的には供給が足りない。再利用、循環型社会ということでは、本県にも随分ダムがあると思う。ダムは農業用水に利用しているのではないかと思うが、農業用水は水を流しているだけなので、水力にも目を付ける。県内全域というわけにはいかないだろうが、県内のダムの再利用や水力を使って電力を供給することも考えるべきではないか。それと並行して、バイオマス、太陽光、風力をやっていくべきではないか。

また、栃木県の場合は、水、森に大変恵まれている。特に今まで、農業の場合は食料生産を目的としていたのではないかと思う。林業は、建築資材というか……。最近、バイオマスの話が出ているが、切り換えをして環境農業を取り入れていく。農業の場合は、春から夏、秋で、冬は（土地が）遊んでいるので、別なものをつくる。農業圏からは外れてくるが、家畜の飼料を生産できるような体制にして、小麦をつくって飼料にする。飼料は外国からの輸入が100%に近いと思うので、自給自足、地産地消ということも計画に入れていくべきではないかと思う。

〔部会長〕

県内の自然エネルギーをより高度に利用して、できる限りエネルギーや食料等の自給率を高めるといった意見だった。

県内にある各種の自然資源を有効に活用するという一方で、特に水力に関しては、企業局でも、中小水力という形で水のエネルギーを利用しようとしているが、そう簡単に、定ラインに達しないのが悩みの種のようなのである。その他、農業、林業、畜産業廃棄物の再利用でのエネルギー化。また、農地を冬も使用するのがどれくらい可能かわからないが、可能であれば大変望ましいことだろう。

〔委員〕

先日、茂木町の美土里館を見学した。食物残渣と牛の糞と木の葉を上手にブレンドして肥料をつく

っている施設である。大変有効な肥料で、地域の農業にも貢献している。木の葉を集めるので、地域の山がきれいになるし、高齢者の方々が集め、1袋400円くらいで売れるので、それが楽しみになり、お年寄りも生きがいを持って働くことができるという一つのモデルを見てきた。そういうものが県内各地にできると良い。

今、各地に大型焼却炉ができていますが、最近、分別が進み、水分の多い食物残渣が多くなり、なかなか燃えなくなっていることが問題になっている。それを循環型の肥料に利用すれば、またそれを農業に返すことができ、一つの大きな循環型社会のモデルができるのではないかと。

県内には、林地に木材が切り捨てられてそのままになり、本当に山が暗くて山の環境が悪くなっているようなところがある。残材を利用してバイオマスエネルギーに取り組んで欲しい。それで全体のエネルギーを賄うことはもちろん不可能だとは思いますが、小さな地域のエネルギーや熱量を賄って、モデル地域のようなものが幾つかできると良いのではないかと。特に、日光地域などは観光地ではあるが、文化的遺産がある旧日光地区以外は少し魅力に乏しい。では何を売りにするかというところがあるので、そういった現代の課題に対応したような一つの集落ができると、それだけでも少し変わった見方ができるのではないかと。

〔部会長〕

間伐材がそのまま伐り倒しになっているもの、環境学習とタイアップし、そういうものを集める部分を学習の一環としてやれると良いのではないかと。それが非常に有力なエネルギーにはならないだろうが、例えば、バーベキュー用のたき木くらいはそれで集められかという気もする。

〔委員〕

部会は幾つかに分かれているので、他のテーマは他でということになるだろうが、(環境のテーマは)非常に広がりがあると思っている。今、ワールドカップの真っ最中であるが、ワールドカップは一見、環境と関係ないようだが、ナイキでは、1リットルのペットボトル8本分ぐらいで1人の選手のユニホームをつくり、しかも、環境に優しいという企業イメージだけではなく、ユニホームの13%ぐらいの軽量化も図っている。この部会のテーマは、極端なことを言えば県政全般に浸透していく要素があると思うので、実際に書き込まないにしても、そういうスタンスで検討していければと。環境というのは非常に重要な領域である。

〔部会長〕

事務局から、部局横断的に、縦割りととらわれずに進めるという説明もあったが、環境問題は、ほとんどすべての問題とどこかで絡んでくる。環境問題だけでやろうとすると非常に狭くなるので、むしろ部局横断的ということを出してまとめて欲しい。

〔委員〕

普段やっているエコとは余り関係ないが、「みみずのカーロ」という本のことを皆さんにお話ししたい。ドイツの小学校の教室でミミズを飼うのだが、子どもたちが餌をあげようと家からいろいろな

ものを持って来るが、食べない。何を食べるかという、子どもたちの弁当のパンやチーズや果物など、人間が食べるものを食べる。そうすると、そこに糞が出る。それも土の中に混ざり、ますます住み心地が良くなっていく、ということ子どもたちが教室で体験する。子どもたちは、何が良くて何がいけないかを体験していく。子どもたちは、ゴミを平気で捨てていたが、地面に捨てたゴミはいつまでも残る。でも、ミミズのカー口がいる土の中に入れたものは残らない、要するに循環されてしまう。地面に落ちても循環されていくということ子どもたちは勉強する。

額にしわを寄せてやらなければならないのではなく、子どもたちが小さいころから自然に学習していく、それが生活の中で普通であるということ、どこかに組み込むことはできないだろうか。

エコバックについても、私たち大人は面倒くさいというのが結構あり、たとえ5円を払ってもスーパーの袋をもらったほうが良いという人もいるくらいである。大人はなかなか変わらない、柔軟な子どもの時代から、県内の自然環境を学ばせる方法を何か入れられたら良いと思った。

〔部会長〕

生活の中で学んでもらうためには、大人がやっていないと、なかなかできないのではないかなと思うが、少なくとも、まだ頭のやわらかい子どもたちが基本的なことを身につける場があれば良いというのは、そのとおりだと思う。そこでかなりパイアスのかかり過ぎた理想的な環境論になってしまうと、今度は何らかの誤解が生じるということもあり、なかなか難しい。

〔委員〕

先ほどの美土里館は、里山対策にもなるし、生ゴミの軽減にもつながるし、焼却が少なくなるし、また、里山をきれいにするという作業をすることで高齢者対策にもつながる。そういう相乗効果は、重要だと思う。そういう相乗効果を上げられるような施策は、恐らくいろいろな案を出すことでたくさん出てくる。一番知恵を持っているのは、やはり現場の人々で、例えば、分別の仕方をどうするのか、どうやったらみんながやるかという知恵が一番持っているのは主婦である。現場のやりたいことをどんどん挙げて、でもお金がないとか、この規制があるとか、いろいろな問題点が出てきた時に、そこを何とか解消していくのが、わざやお金を持っている企業の役割ではないだろうか。相乗効果を活かすようにして、その中では現場の声を活かす。

また、縦割りにとらわれず合理化を図るという視点がこれからは必要になる。社会全体、システム全体の合理化という観点が重要である。

環境学習については、私も保育園に通っている子どもがいるが、保育園の中でとても良い教育をやってくれる。例えば、藍を種から育て、一方で蚕も育て、それを織物にして織っていく。こういった自然体験というのは栃木県ならではの体験だと思う。

余談だが、先日、テレビで、小さいときに自然体験をしている子は、社会に出てから何かをやるというモチベーションが高くなるということが統計的に出ているということだった。そのようなことを考えると、自然体験をするということそのものが重要であるし、目的化されて良いのではないだろうか。

一方で、先ほどの意見にあったように、正確に教えることも重要である。

大学の学生支援の活動の中で、紙ゴミ用のごみ箱をどこに置けば良いかを知っているのは学生だが、プラスチックゴミをどうリサイクルするのが適切かを良く知っているのは学生ではない。適切な方法を適切な人が選べるように、あるいは誘導できるようにしていくという協働の形を模索することが重要になってくる。

〔部会長〕

今の発言の中で、保育園などである種の自然体験をすることが後々非常に良い、といったことは、協働によるかどうかは別として、環境学習ということでは強調して、プロジェクト1の推進方法として入れても良いと思う。実験的にやるだけでも、県下の保育園、全部でやっても良い。具体性があり、かつ実行が難しくない意見である。

〔委員〕

既にやっているところもたくさんあるが、すべての保育園でやる必要はないと思う。それぞれ得意なことをやればいいし、それを伸ばしてあげることが重要である。

また、木質バイオマスを使ってボイラーをつくっている会社から聞いた話だが、ボイラーを納めているある公園では、1回100円で薪割り体験をさせている。公園としては、木を薪にする作業はたいへん重労働であるが、お客さんが来て、しかも100円を落としてくれるということで、相乗効果があるということだった。栃木県は埼玉県や東京都も近いので、環境学習ツアーなども可能だと思う。

〔委員〕

栃木県民すべての人が農に親しむ企画があっても良いと思う。里地里山の保全と、言葉では簡単に言えるが、なかなか具体的な案はない。リタイアした方で自然に親しみたいという方と、農家の人だけでは耕すことができなくなってしまった農地をマッチングさせて、自家菜園をやるような環境をつくることも良いのではないかと。自然と親しむとか環境を知るということは難しいことで、きれいごとではないということが分かることも必要ではないだろうか。

私も貸し農園をやってみようかと思ったが、いろいろ制約がある。休み所をつくらなければならない、お手洗いをつくらなければならない、何年契約がどうのこうのと・・・あるようなので、難しく考えなくても貸し借りができるようなシステムをつくれれば、荒れた減反の畑や田んぼが少なくなるのではないかと。希望すれば、誰でも家庭菜園ができるような環境をつくっていくことも必要ではないか。

〔委員〕

環境教育を観光に活かすという方向は、楽しくて財政も安定して、ということで大いに取り入れていって欲しいと思う。

しかし、体験学習で山の中に入るときは、私たちが子どものころは必ず長袖、長ズボンなどで、けがをしないように、虫に刺されないようにして入っていったが、現在は、タンクトップで虫よけスプレーをして山に入っていくので、自然が破壊されてしまうという問題も出てきている。農業体験にし

ても、完全無農薬でつくりたいが、隣の畑では農薬を使っているなど、特に、住宅地での農業に関しては、農水省から出ている使用方法なども視野に入れて取り組んでいって欲しい。

また、子どもたちを誘導していくという環境は本当に賛成だ。欧米などでは、子どもたちに、何が問題で何が問題でないかということをもまず議論させ、その後で、周りの大人たちにインタビューをして歩くなど、自分たちで方法を見つけて実行させていくという環境学習がある。机の上でだけではなく、また、用意された田畑に行っていくということではなく、一つの問題を全体からとらえていく環境学習へと広げていけば、いろいろな方面で相乗効果が現れるのではないだろうか。

〔部会長〕

環境学習のためのリーダー育成をどう広げていくかということも課題である。重点戦略やプロジェクトについて、ああしよう、こうしようといっても、リーダーの育成も加えておかないと、言葉だけで終わってしまうので、ある程度詰めておくことが必要かと思う。

経済学で範囲の経済という言い方をすることがある、同じ行為で複数の効果が上がるようなものをする。相乗効果という場合には、2つの独立した行動が相互に関連し合って成果をより高くする。もちろん両方必要である。範囲の経済の相乗効果も、従来の行政のやり方ではなかなか成果が出にくい。だからこそ政策の上に「総合」を冠した部局ができたのだと思う。

財政制約がある中で、環境問題は関連するということが多々あるので、部局横断で縦割りにとらわれず、複数の施策で大きな効果を上げる、相乗効果を得る。あるいは、先ほどの例であれば、子どもたちを里山に入れて、そこに間伐材を持ってきてたき木をつくってもらおうと、そのまま自然との共生、環境学習、ある程度まで環境保全行為になるというように、1つの行動で複数種類の効果があるといった行動をやらざるを得なくなっている。財政が豊かな時代には、1つの事業で1つの効果だけ出れば良かったが、資金のより有効な活用を真剣に考えざるを得ない時代では、うちの部と課の仕事ではないという部分は乗り越えるべきである。それが「未来につなぐ環境戦略」に入ってくるのかどうかは分からないが、すべての領域において強調すべき事柄であり、とりわけ環境領域では関連するところが多いと思っている。考慮してもらえれば幸いである。

〔委員〕

相乗効果の良い事例を思い出したので1つ述べたい。今、県内の高校すべてが電力モニタリングシステムを導入している。電力を抑えるために、午前中、暑くても我慢をして、午後の1時か2時になると一斉にエアコンを入れる。そうすると、電気量が多いのでデマンド値（30分間における平均使用電力）に達してしまい、結果的にCO₂もたくさん出てしまうし、光熱費は非常にアップしてしまうし、我慢もして大変である。このモニタリングの結果、デマンド値を抑えるためには、午前中から少しずつ緩くエアコンを入れて、一番暑い1時、2時くらいにも緩くエアコンを入れておけば、全体のデマンド値は増えないので、光熱費もダウンし、何より快適に過ごせるということが分かった。

この事例からも、発想の転換、あるいは、実際に「見える化」をすることで、CO₂を落とすこと

もできて、しかも快適になる。

小学校・中学校レベルでモデル校にエアコンを入れているところはたくさんあるが、県内高校全部というのは栃木県の快拳なので、このようなところを広げるのもやり易いし、お金は余りかからないし、見ばえもするので、良い事例になるのではないか。

〔部会長〕

このようなことは県としても広報したらいかがだろうか。環境や地球に優しいというと、毎日、額にしわを寄せて、必死に耐えて、結果として大して効果がないことも多々あるので、「見える化」による合理的な行動というのは、環境学習として大事なポイントだろう。

(2) 次期総合計画における指標設定の基本的な考え方について

〔部会長〕

指標設定の基本的な考え方について、意見ををお願いしたい。

〔委員〕

政策マネジメントに非常に感心した。シンプルなインプット、アウトカム等々の指標は8年続いて9年目、ということは、あえて言うと非常に良かったのではないかと思う。こういうことを、より厳密にしようとして細かくすると、結局、分からなくなって、他の自治体では続いていない。このシンプルな指標が、もちろん十分ではないにしても、続いているということが、まず大前提としてある。

現計画の成果指標についても、達成状況は、
、
の3つに分けたことがとても良く、もちろん達成状況が
だから、これで事足りてすべて終わりと言えないのは分かっているが。

最後の資料あたりに、もしデータが可能であれば、
がついたものはどうだったかというのを載せても良いかと思う。次の総合計画では思い切って、
のついている以外のところに注目し、
のところを重点的にやっていって、プラス、別の成果指標という形で記載していった方が良いと思う。

具体的に、成果指標一覧の施策513「廃棄物処理対策の推進」は納得のできる達成状況である。

広域のごみ処理施設の問題を、我々大学関係者も協力し、従来の迷惑施設という発想を逆転して、楽しく遊べて環境学習をする、みんなが行きたいところにしていく、いろいろなイベントをやって行こうとしたが、結果から言うと瓦解した。総論賛成各論反対というか・・・、この辺のところを見ると非常に納得がいて、私にとっては
だと思う。私見であるが、こういう問題は当該市町村や広域の組合に任せるのは限界がある。ぜひ、教育的な視点から、こういった指標は残しておいて欲しい。

の付いている廃棄物監視員の設置市町村割合についても、現実には、県外からも含めて捨てに来るのである。自然豊かですばらしいということが逆利用されてしまっている。ぜひこういう指標は残しておいて、極端なことを言えば、
の付いていないところをやっていく。それにプラス、我々の知恵で新しい成果指標を出していければと、基本的な考え方として提案したい。

〔委員〕

指標は、戦略のプロジェクトごとにつくるという理解でよろしいか。

〔総合政策部次長〕

そのとおりである。プロジェクトごとに目標値としての指標をつくることになる。

今回の意見等を踏まえ、取組を整理した上で、それにふさわしい成果指標を設定したいと考えている。

〔部会長〕

ということは、現計画の指標に入っているものが消えることもあるのか。

〔総合政策部次長〕

そういうこともある。

〔委員〕

どうしても担当部局では、達成状況に が並ぶ指標は、本音のところでは出しにくいということがあると思う。指標の見方について我々の力量も試されている。仮に、全部 になったとしたら、けしからんということになるのかどうか。場合によっては、いろいろな要因が絡むので、そのところはぜひ英断し、担当者はよく分かっていると思うので、非常に重い問題でも指標として出して欲しい。ある程度 が付けやすいということ念頭に置いてつくるのではなく、より困難なことをやって欲しいと思う。

〔部会長〕

指標に対する評価には、良い評価が得られやすいかどうか、数字で結果が得やすいかどうか、という問題がある。不法投棄の指標などは、探すと出てくるし、探さなければ減ることになる。なかなか大変だろうとは思ふ。

また、指標の評価をする専門家集団、簡単に言うと、県庁職員が一番詳しいが、県民、議会など外部の余り中身を理解しない批判に対して、きちんと答えられる体制をつくっておかないと、どうしても が付きやすい指標を選びたくなると思う。それぞれに専門的な知識が必要なので大変だが・・・。

指標化は、三重県の北川元知事が始め、大変評判になったと思うが、他の自治体に追加の仕事をつくって、余り役に立っていないという評価もある。基本的には、役に立つ指標をつくって、それを適正に見るという当たり前の結論しかないわけだが、それがなかなか難しい。

〔委員〕

確認だが、この指標をもって、栃木の環境戦略すべてがうまくいっているかが分かるというものではない、あくまで分かりやすくとらえるための指標、全体的なものを網羅したものである必要はない、という認識でよろしいのか。

〔総合政策部次長〕

この指標は一つの判断基準である。すべてこれでというオールマイティーなものが入れば良いが、必ずしもそうではない。事務局としては、これらを参考に、県民主体の行動がどのように戦略達成に

結びついていくかという点を総合的にとらえて評価せざるを得ない部分も出てくると思う。

〔委員〕

現計画の3つの分かりやすいシンプルな指標は、とても良い。できるだけ分かりやすくシンプルで、数値でとらえやすいということは重要だが、一方で、挑戦してほしいとも思う。あとは、意味のある目標である必要があると思う。誰が見ても、この指標を見たら良くなっているということがイメージできるような、少し包括的な指標も必要である。

例えば、フードマイレージとか、地産地消率がどのくらい進んでいるか、ウッドマイレージという話もあるかもしれない。意味がある指標をつくるのは簡単ではないが、ぜひ検討してほしい。

〔部会長〕

意味がある指標には、他にどのようなものが考えられるだろうか。

〔委員〕

うまく言えないが、達成することに一生懸命になってしまう、それが自己目的化してしまうのは良くないと思う。例えば、冷房の温度 28 度というのも、私は意味がないと思っている。本当に快適で 28 度ならば良いが、冷房の温度を 28 度に設定しても、実際には 31 度くらいあるのだから、とても暑くてしんどいと思う。分かりやすいが、余り意味がない指標ではだめである。

先ほどの、高校におけるモニタリングシステムの導入率、「見える化」を何%進めた、というのも意味のある指標になるのではないか。

県庁でもやっているが、自転車通勤を増やす、自転車通勤を増やすためには道路が必要になる。自転車走るための道路の整備を何%拡充した、というのも意味のある指標かと思う。

〔委員〕

計画も発展していく必要があると思うが、現計画の成果指標が消えてしまうというのはどうかと思う。データは取りやすくなっているはずなので、少し頑張ってもらって、資料あたりに、現計画の指標が次の計画ではどうなったかを入れることは意味があると思う。そうしないと、10年、20年単位で、通して見た人が分からない。こういうものがつなげていくと、どんどん膨らんでいくと思うが、一貫して見られるということがあるのではないか。今はでも、やって見たら下がってくるというものもあると思うので、そこをぜひ基本的な考え方として入れて欲しい。

つまり、次の計画では、巻末でも目立たないところでも良いから、今の成果指標も載せて欲しいということである。

〔部会長〕

指標の主な要件の継続性を重要視すべきということだろう。総合計画をつくるたびに、指標を全部取り換えると、相互比較ができなくなる。しかし、一度決めたものは絶対に変えないというのも問題なので、その辺のさじ加減が難しい。3つのプロジェクト、あるいはプロジェクトそのものも多少組み替えても良いと思うが、それぞれのプロジェクトの達成度を示すようなものを1つか2つは付け加

えたいところである。既存のものが使えればそれでいいし、既存のものでも取るのが大変でなければ、続けたほうが資料の価値は高くなる。ということが、基本的な考え方として提示された。

ただ、それと並行して、プロジェクトにとらわれなくても、栃木県の環境の状況を示す、まさにアウトカムを外から見て分かるものが何かあるといい。

〔委員〕

項目も数値も大切だと思うが、意味のある指標と意味のない指標がある。「産業廃棄物の不法投棄数(10t以上)」は、10t以上というのはどのくらいの量が検討がつかないが、達成状況は が付いている。一般の数値が冊子になったときに出るのかどうかは分からないが、県民は栃木県には不法投棄はないと理解するのではないか。10tが良いのか悪いのか、その辺も再検討する必要があるのではないか。これは が付いていても納得できないと思う。検討して欲しい。

〔委員〕

私も同じことを考えていた。野木町は里山があり、常時いろいろなものが捨ててある。それは税金をかけて処分している。多分、野木町だけで13か所くらいはある。10t以上となると、ゼロなのだと思う。13件という数字を見ると、一般的には栃木県はきれいな県だという感覚になってしまう。

「廃棄物監視員を設置する市町村の割合」で83.8%というと、ほとんどあるという感覚になる。私は素人なので、目標値がどこを100としているのかが見えない。その辺も書き込んであると、分かるのではないだろうか。

〔委員〕

この成果指標の数字を見て、なるほどこういう環境問題もあるのだと再認識した。

「シカの生息密度」については、達成状況が ということは、前年度よりは改善したということか。

〔総合政策部長〕

最終的な目標は1平方キロメートル当たり5頭だった。21年度の目標は1平方キロメートル当たり5.2頭、20年度は7.4頭だったが、6.3頭になったので、21年度の目標値は達成していないが、前年度よりは良くなっているという意味で が付いている。

ただ、これは「とちぎ元気プラン」の目標なので、目標値の22年度の数値がプランの最終目標である。この場合は、徐々に1平方キロメートル当たりのシカの生息密度を下げていって、プランの最終年には5頭にしていこうということを目標に掲げ、それに対して年次でどのような動きを示していったかという数値であり、これを、客観的に や 、場合によっては という3つに分類しているということである。

〔委員〕

この指標は県内全域であるのか、あるいは、どこか特定の地域であるか。

〔環境森林部次長〕

表日光、奥日光、足尾の3地域の8つの調査値での密度である。

〔委員〕

感覚としてはもっと増えているかと思ったが。

〔総合政策部長〕

シカにしてもイノシシにしても、それぞれの動物ごとに保護管理計画というものをつくり、例えば、何頭という目安を設定している。それを超えるものについては駆除する。保護するという部分もあり、それを超えた場合には駆除するという両面がある。その目安の一つとして、この場合は、シカの生息密度を挙げている。ここではシカを挙げているが、その他の資料としては、例えば、イノシシはどうか、農作物に対する被害はどうかというデータもあるので、3つの成果指標の他にも考えられる指標を使って、トータル的に施策の判断をするのがマネジメントのやり方である。

5 その他

- ・ 第2回部会の開催予定 9月9日(木)10:00～ 東館4階講堂